

スポーツを通して古河のまちを盛り上げたい



野球をして遊ぶことが多かった幼少期。野球以外にもサッカーなどいろいろなスポーツで遊んでいた。それがバランスのいい体づくりにすごく重要だったと感じている。

古河で育まれた才能

市長…古河大使として、ふるさとのPR活動をしていただきありがとうございます。古河での思い出を聞かせてください。仁志…古河庁舎の場所は、昔広場だったので、野球をするために自転車で行ったのを覚えています。また、地域に子どもがたくさんいたので町内会のイベントが多くありました。夏になれば、お祭りでさい銭箱を持って近所を回ったり、町内野球があったりしました。小学校で行う朝のラジオ体操にも児童は全員来ていましたよ。市長…あの頃はそうでした。近所にも駄菓子屋さんなどがあり、子どもたちの集合場所になっていました。仁志…はい。私の家の近くにも5、6軒ありました。みんながそこに集まれば、「今日はどこに遊びに行く？」という感じで自然と遊び場が決まっていましたよ。市長…そうすると、みんなと遊びながら自然と野球が始まったという流れですか。仁志…そうですね。当時、みんなで遊ぶスポーツといえば野球かサッカーでしたから。今よりもサッカーが盛んだったので、スポーツをしている人の9割以上がサッカーをやっていたと思います。市長…仁志さんもサッカーをしていたん

昔は子どもたちの運動を地域のスポーツとして支えてくれる人がたくさんいた。だからこそ、気軽に遊びの延長として楽しめる環境ができていた。

ですか？ また、野球を始めたきっかけを教えてください。

仁志…サッカーもやりましたよ。野球を始めたのは親の影響でしょうね。親が野球を観ていたということが一番の理由だと思います。でも、サッカーが盛んなま

ちだったのが私にとっては幸いでした。野球以外のスポーツも日常的にやっていたというのが、自身の運動機能にいい刺激があったのだと思います。

市長…何事もバランスということですね。地域が支えてくれたスポーツ活動

市長…昔は、今よりも時間的に余裕のある大人がいて、子どもたちの面倒を見てくれていました。

正直、専門的な指導者じゃないかもしれませんが、それでも子どもを見てくれる大人がいた、それだけで十分意味のあることでした。

仁志…当時のスポーツ少年団の組織は、すごく理想的だったと思います。小学校のクラス単位でチームを作って試合をしていましたよね。だから、誰でも気軽にスポーツを楽しめる環境がありました。

それ以上やりたかったら市の選抜チームに入るように誘導されたので、それぞれがやりたいレベルでできるという、とてもいいシステムだったと思います。

市長…確かに、昔は各学校のクラスごとにチームを持っていた。それを、うまく運営してくれる大人がいたので、地域でスポーツを支える体制ができていたということですかね。

仁志…その通りだと思います。低学年は町内野球で遊びながら体験し、本気でスポーツをやりたい子に対しての段階が作られた。だから高学年まで継続している子は、本当にやりたいという意志があったんです。

野球を始めたきっかけを子どもたちに聞くのですが、「お母さんにやれと言われたから」「監督に誘われたから」という子が多いんですよ。いろいろなチームを見てきましたが、意識的なところから格差が生じているような気がします。

市長…そうですね。昔は遊びの延長で試合ができて、その中でうまい下手があり、競技としての勝ち負けもそこにあった。そんな経験を繰り返しながらやりたい子は上へどんどん上がっていく。その仕組みを地域全体で支えていました。

運営者としての役割を誰かがごく自然に担ってくれたから、継続できていたということですね。仁志…みんなが情熱的だった。そして、地域コミュニティや地域力があったのだと思います。

仁志敏久 Profile

古河第三小学校、古河第三中学校、常総学院高等学校を卒業。早稲田大学、日本生命を経て1996年ドラフト2位で読売ジャイアンツに入団。2007年横浜ベイスターズに移籍。新人王のほか、4年連続ゴールデングラブ賞を受賞。2013年侍ジャパン代表コーチ、2014年侍ジャパンU-12代表監督に就任。2016年アジア選手権を優勝に導くなど、現在、指導者として活躍中。



針谷市長 × 古河大使 仁志敏久さん 新春対談